

現象の意味論から言語の意味論へ

河原修一

はじめに

言語は、重複的分節をなす記号体系である。記号数も多く、複雑な記号結合関係をもつ。言語記号は、(擬音語を除けば)集団内での任意の約束による形態(素材としての音や模様の組合せ)と意味(形態によつて示される別次元の内容)との結合から成る。意味は、ことばの機能として本質的である。一般的意味論のなかで、言語についての意味論を位置づける。

一、意味の生成

宇宙のなかの生命という時間の流れがあり、無意識的宇宙精神がある。未生以前の縁があり、無意識的生命欲求がある。受胎後、意識の芽生えがあり、様々なおもい(欲求、感覚、感情、思考、意志など)が段階的に生じる。^(注1) おもいうものとおもわれるものがあり、お

もうこととなる。^(注2) おもいが具体化する。

のぞみもとめるもの(欲求するもの)とのぞまれもとめられるもの(欲求対象)があり、のぞみもとめること(欲求という心的活動)となる。のぞまれもとめられるもの(欲求対象)があつて、のぞみもとめ(欲求)が具体化する。同様に、感じるものと感じられるものがあつて、感覚が具体化する。感じおもいうものと感じられおもわれるものがあつて、感情が具体化する。おもいかんがえるものとおもわれかんがえられるものがあつて、思考が具体化する。こころざすものとこころざされるものがあつて、意志が具体化する。欲求から意志へと、段階的に目覚めてゆく。欲求し、感じ、情を覚え、思考し、意志する自分のあることに気づく。

自分をおもいうものと、自分とおもわれるもの(自己像)があり、自分についておもいうこと(自意識という心的活動)となる。様々におもうことのできる自分の存在に気づいて(自覚して)、自意識は主体意識となる。

おもいうものは、おもう主体とおもいそのものにわかれる。自分の

前にあらわれた様々なかたちに対して、あるがまま、あらゆるものがそのまま、おのずからという無自覚な状態から、様々におもいはたらきかけることのできるみずからという自覚的な主体意識へと目覚める。おもひものの未分化な状態から、おもひ主体が分化して、主体が形成される。主体が形成されて、客体としての世界が（客体化された自分も含めて）たちあらわれる（成立する）。

おもわれるものは、おもひことによって主体の前にあらわれたかたち（現象）である。様々なかたちによって、まとまりがくみだてられる（世界が構成される）。様々なかたちをおもひことをくりかえして、世界の構成のありかたをつかむようになる（認知体系をつくる）。

おもひそのものは、おもひことによって分化し、おもわれるものによって具体化する。

自己主体に対する客体としての世界のなかに、自分と同様に様々におもひことのできる他者の存在をみとめて、他者主体の存在をきる（認知する）。客体化された他者も主体となりうることをさとする（認識する）。

おもひことをもたらすものは、いのちそのもの（生命エネルギー）から分化したところそのもの（心的エネルギー）である。様々なおもひのかたちをつくりだすものは、想像力（心的エネルギーの源泉としての精神的エネルギー）である。

みのそとに、みのうちに、ころのなかに様々なかたち（うごきや輪郭、ひろがり、輝き、響き、なぞられる質感）がなぜあらわれるのかという問いが生じるようになる。なぜと問う主体は通常は人

間（自分、他者、自分たち）であり、なぜかとおもいめぐらす内容（現象の原因・理由の探求内容、そのための様々な現象の関係づけ）が意味である。主体が形成されるにしたがつて、意味が問われ、つくりだされる（生成される）。意味は、はじめからあるのではなく、人間がつくる（自他を含めてものごとを関係づける）。主体がつくりだしたものごと（器物、象徴、法制、記号、言語、表現など）の関係づけもある。意味には、問いのレベル（なぜ、なんのために、どういうつもりで……）に応じて様々な段階（原因、起源、由来、理由、機能、価値、目的、意図、効果、利便など）がある。こうして、ものごとが関係づけられ、主体を含む世界が意味ある世界としてたちあらわれてくる。

おもひ主体は問う主体となる。おもひそのものは問いそのものとなる。おもわれるものは問われるものとなる。問われるものは、主体の前にあらわれたかたち（現象）である。問われる内容は、主体がおもいめぐらして或る現象を様々な現象のなかに関係づけること（意味）である。関係づけは、認知体系のなかでの解釈による。

様々なかたちについて問うことをくりかえして、世界の構成のありかたがわかるようになる（認識体系ができる）。問われるものの本質は、主体が問いめぐらして或る現象の根本原因を様々な現象の根本原因のなかに関係づけること（本来的な意味）である。関係づけは、認識体系のなかでの理解（洞察）による。

解釈・理解は、かたちをくみあわせる想像力の働きによる。解釈・理解には、個人無意識的生命欲求による利己的な価値観や、普遍無意識的生命欲求による非利己的な価値意識が加わる。（意味）

二、意味の定義

意味とは、主体の関係づけによる現象の措定である。

関係づける主体は人間（個人または集団）である。神（霊的存在者）が関係づけると信じる（解釈する）こともあるが、信じる（解釈する）のは人間である。

関係づけは、認知・認識の体系のなかでの解釈・理解による。関係づけに際して、無意識的生命欲求の具体化の仕方やレベルに応じた価値観・価値意識の体系が影響する。原因・理由の探求や目的の追求もまた、関係づけ（因果関係、理由・帰着関係、目的・方法関係を見出すこと）に含まれる。ただ、存在の根本原因を探るのか、事物の社会的有用性を求めるのかによって、意味にも様々な階梯がある。

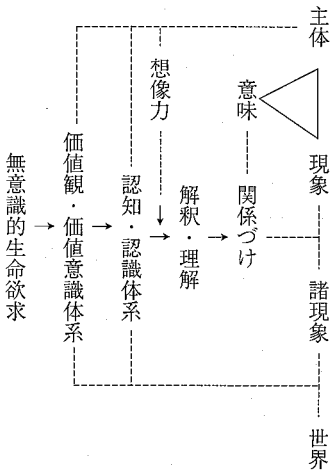
現象とは、あらわれたかたちである。ここでいうかたちとは、うごきとして時間のなかにあらわれるかたちを含む。このころのなかのうごきとして自分だけに知覚できるかたちを含む。特定の感覚器官によって捉えられるかたち（輝き、響き、感触など）を含む。つまり、様々な場^ばに（みのそと、みのうち、このころのなかに）あらわれたかたちである。あらわれたかたちは、空間的に捉えれば（主客を問わず知覚されるあり方を問わず）ものであり、時間的に捉えればことである。捉え方の違いによる。ものとことは一体である。ものごとといってもよい。また、主体の前にあらわれたかたちとして、主体がつくりだしたかたち（記号など）もある。現象には、様々な

レベルがある。

措定とは、関係のなかにおきさだめることである。関係のなかの位置づけによる内容規定である。

意味とは、言い換えれば、主体の前にあらわれたかたち（現象）によって示されるものである。示すもの（現象）があり、示されるもの（意味）がある。意味は、何が示されるかという解釈、理解（その場での理解、様々な場での共通理解としての合意・約束・規則、様々な場を越えた洞察など）によって成り立つ。解釈・理解は、想像力を媒介として、認知・認識の体系および価値観・価値意識の体系に基づいている。解釈・理解によって関係づける主体は、人間（個人または集団）である。

示すもの（現象）と示されるもの（意味）があり、解釈する人間（主体）がいる。意味をめぐる要因について、簡略に図示する（図1）。



【図1】

三、示される意味

主体の前に現象があり、主体にとつての現象の意味がある。現象には、主体がつくりだしたかたちも含めて、様々なレベルがある。出来事（自然現象、社会現象）、事物の存在、生きものの営み、人間のおもい・表情・行為・産物（製品、道具、制度、記号）表現（音楽、絵、文学）などの現象がある。

示すもの（現象）と示されるもの（意味）について、或る解釈・理解の例を表にする。

示すもの（現象）	示されるもの（意味）
1 黒い雲の出現	(a) 雨が降ること (b) 不吉な出来事が起ること
2 赤い斑点の出現	天然痘
3 紅葉	(a) 秋に赤い色に変る葉 (b) 最後の生命の輝き
4 雨上りの庭の雀の動きと囀り	命あるものの存在のよるこび
5 笑顔	(a) 喜び (b) 悲しみ (c) 演じられる人物の心理・性格
6 子供の遊戯での色片の集まり	海面を昇る日の出
7 ままことでの葉、泥玉、小石	家、車、飛行機
8 蓮の花	皿、ハンバーク、ステーキ
9 蓮の花	父親、母親、子供、客人
10 蓮の花	解脱（悟り）
11 十字架	救い主の犠牲による人類の贖罪
12 構成された材木	(a) 机 (b) 机によせるおもい

示すもの（現象）	示されるもの（意味）
13 構成されて焼かれた土	(a) 陶器 (b) 精神のあらわれ
14 棚の上の物を取るための椅子	踏み台
15 小石	(a) 包丁 (b) 武器 (c) 装飾品 (d) 希望、勇氣
16 スプーン	存在価値
17 交通事故	(a) 投げるもの (b) 光るもの (c) 飲食の道具 (d) 存在
18 道の右側を歩くこと	現代文明の悲劇
19 数字	道路の安全な利用
20 貨幣	ある共通な特徴によるまとまりの数
21 首を縦に振る身ぶり（頷き）	社会のなかで交換可能な数量化された価値
22 指さし	(a) 肯定 (b) 確認・促し (c) 複雑な想い (d) 首の痛み
23 コピー、写真、肖像画	(a) 方向 (b) 事物 (c) 指さす人のおもい
24 感覚的知覚	(a) 写された対象 (b) 写す・見る人のおもいの内容
25 記憶	事物・身体感覚
26 夢	過去の事物・感情・思考
27 おもい	無意識
28 ことば	人間としての生存のための環境への関わり
29 音楽、絵画、彫刻、舞踊、文学	(a) 概念・個物 (b) おもい
30 「バラの花のような」	精神のあらわれ
	ほんのり赤みをさした少女の頬の輝き

示すものと示されるものには、暗示するものと暗示されるもの(1(b)、5(b)、象徴するものと象徴されるもの(6-11)、加工するものと加工されるもの(12(a)、13(a)、道具化するものと道具化されるもの(14、15(a)-(c)、16(c)、法制化するものと法制化されるもの(18)、指示するものと指示されるもの(22(b)、記号化するものと記号化されるもの(5(c)、19、20、21(a)、22(a)、28(a)、写像するものと写像されるもの(23(a)、心象化(觀念化、概念化)するものと心象化(觀念化、概念化)されるもの(24-27)、表現するものと表現されるもの(13(b)、21(c)、28(b)、29)、喻えるものと喻えられるもの(30)などがある。

暗示・象徴、加工、道具化、法制化、指示、記号化、写像、心象化、表現、喻は、すべて言語の意味への基礎的あるいは発展的な階梯をなす。

現象を解釈する(諸現象のなかで関係づける)人によって、あるいは場(脈絡、状況)に応じて、意味は異なる。共通に理解する集団のなかで、意味は定まる。

認知・認識の体系、価値観・価値意識の体系のレベルに応じて、意味の階梯は異なる。認知的・価値観的な枠組による関係づけが意味の輪郭であり、認知的・価値意識的な枠組による関係づけが意味の内実である。

主体の前にあらわれたかたちに対して、主体にとって示されるものは何かと考える。解釈や理解、合意、洞察による。主体がつくりだしたかたちに対して、主体にとって示されるものはこれこれと定める。合意や約束、規則による。

概念的に次元または種類の異なるものへの変換が一定の脈絡(場、状況)のなかで理解されるとき、象徴となる。伝え手と受け手との間での意味のやりとりという脈絡(共感に基づく相互理解の場)によって、象徴が成り立つ。

概念的に次元または種類の異なるものへの質的な変換が、個人的あるいは社会的に役立つと認められるとき、加工となる。社会的な有用性という実用的な目的に即した価値観に基づくとき、社会通念的な意味の輪郭が示される。ただ、個人的な思い入れがあるとき、精神的な意味の内実を備える。

異なる機能への変換が、一定の脈絡(場)のなかで、あるいは様々な脈絡(場)を通して理解され、個人的あるいは社会的に役立つと認められるとき、道具となる。日常生活における必要性という脈絡のなかで、実用的な目的のための機能(役割、手段)という実生活的な意味の輪郭が示される。実用的な(相対的な)価値の枠組によるものごとの関係づけである。

取り決めのまとまりが、一定の脈絡(場)のなかで、あるいは様々な脈絡(場)を通して理解され、社会的に役立つと認められるとき、法制となる。円滑な日常生活を保障するための合意(社会的な約束)として要請される規則の体系である。社会的な秩序という価値観の枠組に基づいて、社会的な意味の輪郭が示される。

概念的に次元または種類の異なるものへの変換が様々な脈絡(場、状況)を通して、社会的な約束として、その集団のなかで共通して理解されるとき、記号^(記号)となる。社会的な利便性という価値観の枠組に基づいて、社会的な意味の輪郭が示される。ただ、個人的な思

い入れがあるとき、様々な想いがこめられて、意味の内実を備える。ある操作による異なる場への像の変換（一つの像から別の像への変換）が、写像となる。像は、空間あるいは時間のなかで、一定の広がりをもつものである。

写真とはカメラという装置の操作による三次元から二次元への変換という写像となる。風景や人物のどの部分をどういうふう写真に撮るかに、具体的な装置を操作する人の意思は示される。一枚の写真は、それ自体で何かが写されているということや写されている対象（意味の輪郭）はわかるが、写した人の意思がわからなければ、あるいは共感するものがなければ、それを見る人にとっては意味の内実が伝わらない。写した人の意思がわからなくても、それを見る人が自分自身の想いのなかで、何か感じることがあれば、意味の内実が備わる。写されているものに対する能動的な精神の働きかけがあつてこそ、意味の内実がつくり出される。示されたものごとの関係（意味の輪郭）は、見る人（解釈する人）の興味や関心、愛着、共感、評価など（問題意識、価値意識）に合致するとき、意味の内実が与えられる。

鏡像は、鏡という装置を媒介とする三次元から二次元への（反転する）変換という写像となる。鏡像に写されたものごとの関係が意味の輪郭、写されたものごとに対して抱く想いの内容が意味の内実である。

写像は、一般に外的な操作による異なる場への像の変換をいうが、ここで内的な操作による異なる場への像の変換も本質的には同様の枠組をもつとして認めるなら、（知覚心象のうちの）知覚像や（記

憶心象のうちの）記憶像は、いわば脳内写像となる。実物が人間の意識のなかに映じた（あるいは復元された）像である。脳内に、いわばスクリーンに似た装置があると考えられる。

知覚像は現在でつくられ、記憶像は過去につくられた知覚像の变形した現在化である。知覚像も記憶像も、表象の場は異なるが、広義には心的表象である。

表象とは、かたち（ものごと）が別の場にうつしおかれることである。

知覚や記憶で表象されるものは、認知・価値観の枠組に基づく関係づけとしてのものごとという意味の輪郭であり、認識・価値意識の枠組に基づく関係づけとしてのものごとについての想いの内容という意味の内実である。

四、おもいの意味

おもいとは、こころのなかからあらわれたかたち（ものごと）である。こころのなかからあらわれて、こころのなかに、みのうちに、みのそとにもまれる。

おもいによつて示されるものは、おもいうもの（おもう主体、おもいの内容、おもいそのもの）とおもわれるもの（おもわれるかたち、おもわれる内容、おもわれるものそのもの）、つまりおもうこと（人として生きていること）である。

おもいの意味は、人間としての生存のための環境への関わり（反応、表出、動機、評価などの内的な働きかけ）である。痛みは身体

的損傷、恐れは生存の危険、考えはよりよい生存のための環境への働きかけ（行動）のシミュレーション（実現心象の構成）、喜びは生理的・心理的・精神的欲求の満足（による内的な充実）を意味する。

環境とは、主体をめぐる（主体と関わる）心中、身体内、外界のものとである。

おもいには、欲求、感覚、感情、思考、意志などの様々なかたちがあり、それぞれあらわれる場が異なる。欲求、感覚、感情、思考などの現在での自覚は、それぞれの知覚である。過去での自覚の現在化は、それぞれの記憶である。将来を含む時間を越えた自覚の現在化は、想像である。

おもいのかたち（心象）には、おもうかたち（心的形象）とおもわれるかたち（心的表象）とがある。こころのなからわきあがってくる感情のかたちは心的形象であり、外界のものごとの輪郭や質感をとらえる感覚的知覚のかたちは心的表象である。

心象を生み出し、組合せ、つくり変える力は、想像力（生命力の精神的なあらわれ）である。あらゆる心的活動は、想像力の働きによる。

反復によって方向づけられ定型化した心象は、おもいのかたち（観念）となる。個人の経験・性格に応じた観念と、個人を突き抜けた直観による精神的観念とがある。

分節化と特徴共通化（抽象）によって類化した心象群は、おもいのまとまり（概念）となる。概念は、社会的な一般性を獲得している。

こころのなかのおもいには、ことばにならないおもいことばになるおもいがある。ことばにならないおもいのかたちは感覚心象に変換され、外化されて、音楽、図像、造形、身体表現などとなる。ことばになるおもいのかたちは言語記号体系に媒介されて言語心象（構成的聴覚記憶心象）に変換され、内的に構成されて内言、外化されて外言（談話語、文章語）となる。ことばにならないおもいのかたちも、象徴やレトリックによって言語心象に変換され、外化されて、神話、詩、小説などとなる。

五、ものの意味

おもうことによって自分の前に空間的にあらわれたかたち（もの）と関わりとうとする生理的・心理的・精神的な欲求が生じる。ものに関わりうとして自分が動くことによって、ものは位置を変え、消えたり現れたりする。時間の経過とともに、ものの位置、数、量、質が変化する。ものはことであるとする。

スプーンは、幼少期にはかじったり投げたりするもの（身体延長物、感覚運動複合体）、陽にあてるとキラキラ光ってきれいなもの（情動物、情動喚起体）、物としてのスプーンそのもの（静観物、思考対象）、遊びのなかでの鉄橋やロケット（象徴物）である。模倣習慣によって、社会的な約束をわきまえ、飲食をするときの道具（社会物、社会的機能体）となる。「スプーン」ということばの獲得によって、或る種の飲食をするときの道具という概念をあらわすもの（概念物）となる（概念化への様々な段階がある）。成人後も、日常

生活のなかで（特に深く考えないときは）、そのように共通に理解して、疑問を覚えない。ただ、時には原初体験的、感性的、イメージ的、個人的、本質的な意味などが、詩のなかで再現され、付加され、自由に変形されて、観念象徴物、精神象徴物となる。「スプーン」ということはが生き生きた意味の光を放つ。

ものの意味は、感覚運動複合、情動、静観、象徴、社会的機能、概念、個人的観念象徴、普遍的精神象徴などである。ものの本質的な意味は、存在に示される精神である。

ものの意味は、ものによって示されるもの（ことば以前）からことばによって示されるものへ、さらにことばを突き抜けて示されるものへと、段階的に展開し深化する。

六、ことばの意味

ことばとは、人間のおもいを表す方法としての集団内の約束による記号の連なり（連鎖）とその組合せ（配列）である。

ことばの意味は、人間の様々なおもい（おもう主体、おもいの内容、おもいそのもの、おもわれるものごと、おもわれる内容、おもわれるものそのもの、おもうことの本質）である。

記号の連鎖・配列としてのことばは、様々な脈絡（場、状況）を通して、共通に理解する集団のなかで、意味が定まる。複合記号としての意味である。表現されることばは、脈絡（場、状況）に応じて、意味が異なる。象徴としての意味である。声や字體も意味に関わる。解釈する人（の気分・性格・知識・経験）によっても、意味

がずれる。

「いいよ」という同じことばが、場にに応じて、また声の調子によって、肯定（同意）にも否定（拒否）にもなる。「ちよつと……」という言いさしが、聞き手によって、少しの許容（考慮の余地）、保留、婉曲的な拒否、抗議など、様々な解釈される。

体系をなすことばの全体は言語、ことばを構成する記号は言語記号である。

概念・個物の音（人の声）・図形（模様）への変換が様々な脈絡（場、状況）を通して、社会的な約束として、その集団のなかで共通に理解されるとき、言語記号となる。言語記号の意味は、概念または個物である。言語記号はことばを構成する単位であつて、他の記号と違って独立的でない。ただし、他の記号と同様に標示（ラベル）として用いられることもある。

言語記号の意味は、個人の経験・解釈によってずれる。「ワンワン」ということばによって或る幼児が指し示すものは、犬、猫、熊のぬいぐるみ、毛布などである。その幼児にとって、「ワンワン」によって示されるものは、ふさふさとした感触のあるもの（観念）である。模倣、習慣によって社会的な約束をわきまえると、「ワンワン」ということばによってその幼児が指し示すものは、犬だけとなる。「いぬ」ということばの習得によって、「ワンワン」という幼児語は使われなくなる。「いぬ」によって示される或る種の動物の概念が経験的におぼろげながら心のなかに形成され、「いぬ」という記号との対応が理解される。その後、「コリー」や「動物」ということばの習得と対応して、概念の集まりやレベル、まとまり（カテ

ゴリー)を理解するようになる(認知体系の形成と関わる)。「いぬ」の意味は、カテゴリー間の関係のなかで(認知体系のなかで)位置づけられる。成人後も日常生活のなかで、「いぬ」によって示される概念(意味の輪郭)を常識(認知体系・価値観体系)のなかで受け入れる。犬に対する身心的・個人的な関わりによって、「いぬ」の意味は観念として蘇り(意味の内実を備え、深くおもうとき、精神的観念となる(本質的な意味に至る))。

言語記号の意味は、個人的な解釈、社会的な約束の理解、個人を越えた普遍的な洞察によって、段階的に重複しながら展開し深化する。

ことばにあらわれるかたち(言語現象)には、あらわれかたやあらわれる場の違いによって、主体のころのなかの言語形象(内言)、各個人の記憶に共通して内在する集団内の約束としての言語の枠組(言語記号体系)、具体的な場における言語表現(外言)がある。言語表現に際しては、記号としてのことば(テキスト)だけでなく、ことばとともにある(声・表情・身振り・時・所・場面・人間関係・文化的背景などの)場(コンテキスト)も関与する。広義には、構成的聴覚心象(言語心象)から一般心象に再構成する(復元する)言語理解も、言語現象に含まれる。各個人が共有する言語の枠組によって、相互意思疎通(コミュニケーション)が可能となるが、話し手(書き手)の内的な言語形象化(一般心象から言語心象への変換)と聞き手(読み手)の言語理解(言語心象から一般心象への復元)の一致不一致によって、相互理解と誤解が生じる。誤解は場(脈絡、状況)の解釈の違いによっても生じる。内言・外言は、言語の

枠組に基づきながら、記号能力(コミュニケーション能力)の発達に応じて、個別的にあらわれる。言語の枠組には、文法体系、語彙体系がある。言語の枠組は、ことばの慣用によってフィードバック(原因遡及)されながら(システムとして自己修正しながら)、各個人の意識に関係記憶として蓄積される。

ことばは、生存のための表現として、身体象徴、身体記号、記号、言語記号、言語記号体系、象徴的言語記号体系という順に、重複しながら展開する。ことばの機能には、表出、表示、伝達、人間関係志向、思考方法、詩的象徴がある。それぞれ意味が生じる。

A 表出(身体象徴) (1) 感覚「あつ」 (2) 感情「おお」

B 表示(記号) (1) 指示・応答(身体記号)「これ」「はい」

(2) 標示(記号) (a) 固有名「松江」 (b) 総称「佐藤家」

(3) 前概念(言語記号)「むし」(古語) ↓ 身近な小動物(昆虫

・ 蝸牛・蛙・蛇…)

(4) 概念(言語記号) (a) 具体概念「花」「咲く」 (b) 関係概念「しかし」「を」

(c) 混淆概念「ゆっくり」「ささ」「です」 (d) 抽象概念「いのち」「楽しい」

C 伝達(象徴的) 言語記号体系 (1) 感覚「体がかゆい」 (2) 感情「闇が恐い」

(3) 思考「葉鶏頭の赤い部分は花ではない」 (4) 認知「机の上に本がある」

(5) 意志「早くしてくれ」

(6) コンテキスト(場、状況、脈絡)との協働「僕はホット」

(喫茶店での注文)

D 人間関係志向(1)相槌・挨拶(身体記号)「まあね」「おはよう」

(2)円滑化(確認・促進)「象徴的言語記号体系」

a 「どちらへお出かけですか」

b 「ええ、ちよつとそこまで」

(3)疑義(はぐらかし・抗議)「象徴的言語記号体系」

「okあ」「ちよつとひどいんじゃない？」

(4)決裂・破綻「象徴的言語記号体系」「覚えとけ」

E 思考方法「象徴的言語記号体系」

(1)言語的思考「風が花を散らす」と考える

(2)内言「あの元氣かなー会いたいなー」

(3)独言「参ったなあ」

(4)対話 a 「これで桜とか咲き始めたら、もうもつと眠い病に

かかっちゃう……」

b 「それ、恋人がいらないせいでよ。恋人、できた？」

F 詩的象徴(1)ニュアンス「象徴的言語記号」「花」↓華やかさ、

盛り、真摯…

(2)修辞「象徴的言語記号体系」「言わぬが花」↓沈黙のもつ

表現性・価値

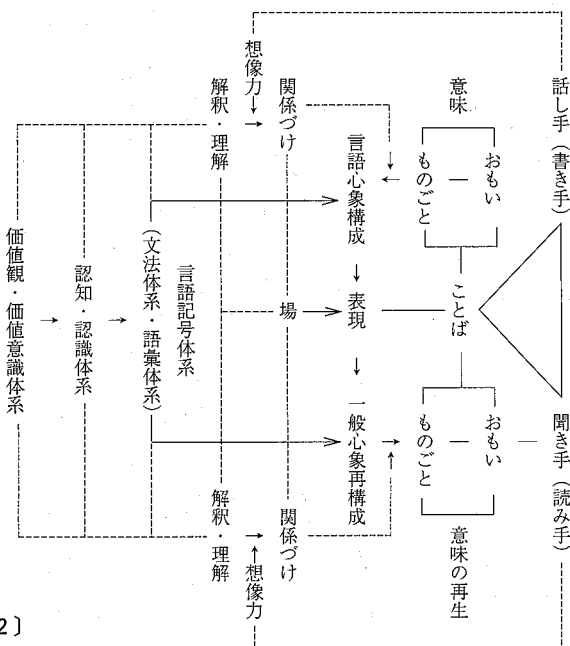
(3)詩的言語「象徴的言語記号体系」「その花を／夢の花と呼

ぼう／なぜなら／その花は／心の崖に／人知れず咲いて／

いるのだから」(金井直) ↓希望

個人的なおもいの意味を社会的な記号の組合せによって伝える。

個別的でありながら人間として共通するおもい、人間として共通し



ながら個別的なこのおもいを、ことばであらわす。意味の輪郭だけでなく、意味の内実を表そうとする。
示すことばと示される意味(ものごと)によせるおもいがあり、解釈し理解する話し手・聞き手(主体)がいる。意味をめぐる要因について簡略に図示する(図2)。

【図2】

七、今後の課題

様々な現象を主体の生物的・社会的・精神的な生存の必要に応じ、どのように区分し、関係づけるか。意味体系が形成されて、主体にとっての意味が定まる。

主体にとっての意味をことばであらわすときの基盤として、言語の枠組（文法体系・語彙体系）がある。文法体系と語彙体系の有機的関連を明らかにする。

共時的には、語は必ずしも意味と一対一に対応していない。通時的には、言語成立時点における集団内の約束としての語の意味が推定される。意味は類縁的に変化し続ける。類縁的に重なり合う意味の輪の広がりの中で、中心の意味と周縁の意味とを区分し、形態も勘案しながら、言語単位としての語を設定する。

意味体系から語彙体系へ、語彙体系から意味体系へという双方向から理論化を試みる。

(注1) 河原修一 (二〇〇〇b) 参照。

(注2) プラトン (一九六六訳) 参照。

(注3) 仏教唯識説参照。

(注4) 河原修一 (二〇〇〇a) 参照。

(注5) 河原修一 (二〇〇一) 参照。

(注6) 記号は、象徴に含まれる。

(注7) ヴィゴツキー (一九七四訳) 参照。

(注8) 松江市内の或る保育園で観察された事例 (二〇〇〇年)。

参考文献

- 1 池上嘉彦『意味論』(一九七五) 大修館書店
- 2 山内得立『意味の形而上学』(一九六七) 岩波書店
- 3 野林正路『意味をつむぐ人びと』(一九八六) 海鳴社
- 4 オグデン、リチャーズ『意味の意味』(一九三三) 石橋幸太郎訳 (一九六七) 新泉社
- 5 ヴィゴツキー『思考と言語』柴田義松訳 (一九七四) 明治図書
- 6 プラトン『テアイテトス』田中美知太郎訳 (一九六六) 岩波書店
- 7 河原修一『日本語心象表現論』(二〇〇〇a) おうふう
- 8 河原修一『意味の生成—ことば以前—』(二〇〇〇b) 『島根国語国文』一一
- 9 河原修一『意味論への試み』(二〇〇一) 『宇大国語論究』二二